

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：10101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652068

研究課題名(和文) 教会閉鎖と霊廟開設 ソビエト政権成立期における公共空間の再編過程に関する研究

研究課題名(英文) Destruction of Orthodox Churches and Construction of Mausoleum -- Study on the reconstruction of public space in the formation of Soviet Russia

研究代表者

宇佐見 森吉 (USAMI, SHINKICHI)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：20203507

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：ソビエト政権成立期における公共空間の再編過程の特質を明らかにするために、教会閉鎖と霊廟開設という象徴的事例を取り上げ、教会閉鎖と聖遺骸開封にともなう反宗教宣伝の視覚化の過程、レーニン没後の霊廟開設から1930年代に構想されたソビエト文化宮殿造営計画へと展開するソビエト的公共空間の構築の過程について資料を収集し、文献調査を行なった。調査結果は関連する事象を年譜に整理し、報告書にまとめて刊行した。

研究成果の概要(英文)：Our purpose of the investigation was to define characteristics of public space in the process of reconstruction in the Revolutionary Russia. Destructions of Orthodox Churches and constructions of Mausoleum of Lenin or Soviet Palace are its symbolic examples. As a result of the survey we published a bulletin with a timetable of historical and cultural facts.

研究分野：人文学

キーワード：ロシア 教会 霊廟 美術館 レーニン シシューセフ ソビエト

1. 研究開始当初の背景

ソビエト政権樹立後、1918年1月に採択された「教会の国家からの分離および学校の教会からの分離に関する布告」によって教会財産は国有化され、古美術は教育人民委員部の管理下に置かれた。こうした新政権の宗教政策のうちでもっとも注目されるのは、翌19年4月19日、セルギエフ・ポサードの至聖三者セルギー大修道院で行なわれたラドネジのセルギーの遺骸開封である。開封に抗議する総主教の書簡、開封時の記録、修道院閉鎖に至る経緯等については、修道院長アンドロニク『至聖三者セルギー修道院の閉鎖とラドネジの聖セルギーの遺骸の運命 1918 - 1946』(2008)に詳しい。本研究はこうした近年の教会史の見直し、新資料の公開に刺激を受けて着想されている。ソビエト政権による聖遺骸開封は、「不朽体」の物質性を暴露することによる反宗教宣伝を意図していたが、「不朽体」の物質性を前景化させようとする政権側と、「不朽体」のイデーの非物質性を主張する教会側との論争については、グリーン『輝ける星のような肉体たち ロシア正教における聖人と聖遺骸』(2010)に詳しい。教会財産を収蔵する美術館の開設に異議を唱え、「生けるミュージアム」として教会の擁護を訴えたフローレンスキーの論考「芸術の総合としての聖堂儀礼」(『逆遠近法』西中村浩訳)からも本研究を構想するための視点を得ている。レーニンの遺体保存については、ズバルスキー『オブジェクト 1』モスクワ(2000)、エンカー『ソ連におけるレーニン崇拜の形成』(1997, 2011)からも示唆を得たが、共産主義のイデーの視覚化の問題を考察するにあたっては、むしろイデーの視覚化(物質化)を通じて、そのイデーの不朽性を前景化させようとする権力と芸術家の協働作業について考察を進めることも重要である。その意味では、ソビエト文化宮殿建設をめぐるスターリンのイデーを論じ

たフメリニツキー『建築家スターリン』(2007)さらには、共産主義ユートピアのイデーが視覚化されていく過程の再現に強い関心を抱いている美術家イリヤ・カバコフの『赤い客車』を始めとする一連のインスタレーションも本研究を構想するきっかけとなっている。また、本研究はロシアの古聖像が交換、学術、博覧、芸術創造、文化財の対象となる過程を追う申請者の研究「20世紀初頭のロシアにおける『古聖像の発見』とその文化的意義について」(平成21年度~23年度挑戦的萌芽研究・研究代表者宇佐見森吉)の成果を発展させ、引き継ぐものでもある。

2. 研究の目的

以上のように本研究では、ソビエト政権の成立期における教会閉鎖と聖遺骸開封にともなう反宗教宣伝の視覚化、霊廟開設を始めとする公共空間の構築にともなう社会主義ユートピアの理念の視覚化の過程について検討を行ない、ソビエト政権下の公共空間の再編過程の特質を明らかにすることを目的としている。本研究の全体構想は、そうした事例の考察を通じて、ソビエト政権成立期における公共空間の再編過程の特質を視覚文化研究の立場から明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) ソビエト政権成立期の教会、美術館、霊廟、文化宮殿が視覚化するイデーについて、教会閉鎖「生ける教会」霊廟開設文化宮殿構想の4つの観点から事例調査を行なった。レーニン廟や聖遺骸はこれまで政治史や教会史の対象であった。

(2) 本研究はこれらの学術成果に依拠しながらも、視覚文化研究(イデーを物質化する機構の研究)の立場からこれらの対象を考察した。その過程で新たな視点、とりわけ文化の接続の問題を顕在化する視点を提供することを重視した。

4. 研究成果

(1) 教会閉鎖

ソビエト政権下の教会史については、アンドロニク修道院長の著書に見られるように、近年続々と新たな資料が公刊されている。とりわけソビエト政権樹立前後の正教会の歴史に関しては、正教会の後押しもあって、関連研究の刊行点数も増加の一途をたどっている。ソ連時代にはまったく知られていなかった事実も少なくなく、本研究でも当然のことながら、そうした正教会をめぐる資料や歴史研究の成果を参照しつつ研究を進めたが、本研究が着目したのは教会の受難の記録や政権との闘争の記録、あるいは政権による収奪と破壊の記録ばかりではなく、むしろソビエト政権が聖遺骸開封を反宗教宣伝に利用する際の「科学」的な視線の様態である。アンドロニク修道院長の著書に収録されているラドネジのセルギーの聖遺骸の開封は、医師が遺骸の調査にあたり、その所見をまとめているほか、遺骸開封の様子はすべて撮影隊が映像として記録した。こうした医師による医学的所見の作成、撮影スタッフによる映像の記録は、権力の視線が聖遺骸の開封を魂の「科学」をめぐる一大メディアイベントとして捉えていたことを雄弁に物語っている。グリーンが『輝ける星のような肉体たち ロシア正教における聖人と聖遺骸』の中で蒐集した不朽体をめぐる歴大なエピソードの中にも、こうした「科学」に依拠したメカニク的な視線の存在をたえず抽出することが出来る。ソビエト政権による教会閉鎖は、教会を占拠し、器物を没収し、教会の閉鎖というかたちで宗教的な機能を封印するだけでなく、祈りと瞑想の空間を「科学」の視線の交錯する展示と陳列の空間へと変質させる操作を含んでいたものと考えられる。教会閉鎖の根拠となった教会財産の国有化は、古美術や古物を美術館や博物館の収蔵品として接收し、美術史や歴史学等、学術研究の対象とすることを意味している。フローレンスキー

が教会を美術館とすることに異議を唱え、「生けるミュージアム」として教会を機能させることを訴えたこと背景にも、こうした「科学」的操作の問題がある。教会閉鎖とは霊廟開設のみならず、ミュージアム開設の問題であったと言い換えることが出来るだろう。

(2) 霊廟開設

レーニン廟に安置されることになる遺体も、ズバルスキイの回想に詳述されているように、「科学」の威力を誇示している。レーニンやマヤコフスキイ、アンドレイ・ペールイなどを標本とするソビエト期の脳研究に関するスピヴァークの著作を参照するなら、遺体をめぐる「科学」は、レーニンのみならず、ソビエト期に死者の仲間入りをした不滅の天才たちにも及んでいることがわかる。一方、こうした不死の「科学」は、レーニン廟のように視覚化されることに特徴がある。本研究ではこうしたイデーの視覚化の機構について考察を進めると同時に、設計者シシューセフのデザインにも注目した。シシューセフのデザインした霊廟には三つの段階があることが知られているが、各段階の特徴については、これまでも分析が行なわれている。むしろ興味深いのは、シシューセフのデザインしたレーニン廟が、ズバルスキイが明らかにしているように、遺体を定期的にメンテナンスし、薬品により保存する遺体保存装置としても機能していることである。ピラミッドやジグラートを思わせるシシューセフの霊廟のデザインの構成主義は、シシューセフとともにコンペに参加した同時代の建築家シェフテリのデザインにみられる近代様式と著しい対照をなしている。このことはシシューセフが新ロシア様式を代表する建築家として20世紀初頭の教会建築にの領域で活躍していたことを考えると、いっそう興味深い。建築家シシューセフにとってレーニン廟と教会建築は、まさに「聖なる建築」として接続し

ている。近年のシシューセフ研究はまさにこの事実を明らかにしている。そのため、今回の研究では、下記の通り、建築家シシューセフの革命前の業績についても調査を行なった。ロシア革命をはさんだ文化の接続の問題は、「レーニン廟の建築家」として称揚されていたシシューセフの業績を、革命以前の業績を含めて見直すことでいっそう明確になると判断されるからである。

(3) シシューセフとマルタ＝マリヤ修道院庇護聖堂

建築家シシューセフが教会建築の分野で注目されたのは 1908 年のオヴルチの聖堂再建、モスクワのマルタ＝マリヤ修道院庇護聖堂の建設に携わったことによる。創設者エリザヴェータ・フォードロヴナは 1905 年、モスクワ総督セルゲイ・アレクサンドロヴィチ大公暗殺事件で夫を失い、女子修道院の開設を決意する。日露戦争の傷病者、貧困疾病に苦しむ児童を併設した病院孤児院に収容し、慈善活動の拠点とした。ソビエト政権樹立後、逮捕され、皇族らとともにエカテリンブルグ郊外の鉱山で殺害されたことが報告されている。残された修道院は革命後も活動を続けたが、1926 年閉鎖され、跡地にはグラバリー記念全ロシア学術修復センターが置かれた。1992 年、エリザヴェータ・フォードロヴナ大公女は列聖され、2009 年には修復工事の完了したマルタ＝マリヤ慈悲修道院で記念式典が開催されている。それにともないシシューセフの教会建築の業績が近年再評価されていく過程にあることすでに述べた通りである。マルタ＝マリヤ慈悲修道院庇護聖堂の建設に着手したシシューセフは、急ピッチで作業を進め、着工 2 年で外回りを完成させた。プスコフ＝ノヴゴロドの教会建築の伝統と近代様式の融合した新ロシア様式の教会は、ミニマルな装飾、シンメトリーの欠落、ロマンチックな外観を特色とし、ドームに鉄骨を用いるといった近代建築の要素も

取り入れた。こうしたシシューセフの教会建築の業績は建築史の観点からだけでなく、メディアの視点から公共空間の形成を考察する文化研究の観点からも興味深い。教会の閉鎖も霊廟の開設も、不死不滅をめぐるイデーの攻防であることには変わりがない。シシューセフはそのイデーを建築物というかたちでつねに占有してみせる。けれども、建築家シシューセフの役割は、その住民となることよりも、注文者のイデーを忠実に伝える媒介者にとどまっていたことに特徴がある。

(4) 研究の総括と今後の課題

今回の調査結果は関連する事象を年譜「教会閉鎖と霊廟開設」に整理し、報告書にまとめて刊行した。年表は平成 21 年度(2009 年度)～平成 23 年度(2011 年度)科学研究費補助金挑戦的萌芽研究(課題番号 21652031 研究代表者 宇佐見森吉)「20 世紀初頭のロシアにおける「古聖像の発見」とその文化的意義について」研究成果報告書(2011)に収録した「古聖像の発見とロシア文化(年表)」のうち、本研究主題に関係のある 19 世紀以降の項目を加筆修正したほか、今回の調査結果に従って大幅に増補するかたちで作成した。教会閉鎖と霊廟開設というソビエト政権樹立期に生じた事象は、ロシアにおける宗教、美術、政治、社会の各領域に生じた価値の転換を象徴する出来事である。教会は閉鎖され、教会財産は国有化された。教会が所蔵していた聖像は鑑定され、修復保存の対象となった聖像はロシア美術史の不滅の作品として美術館に所蔵された。政治指導者の霊廟が開設されただけでなく、不滅の古美術を収蔵する美術館という空間が、不死の展示空間としてソビエト政権下の公共空間に組み込まれていったのである。その意味で、教会閉鎖と霊廟開設はすぐれてミュージアムの問題領域にある。ソビエト政権樹立期のミュージアムでは真正性はいかなるかたちで確保されたのか。そのことを解明することが本研究の今

後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

宇佐見森吉、教会閉鎖と霊廟開設 ソビエト政権成立期における公共空間の再編過程に関する研究 平成24年度～平成26年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究(課題番号24652068)研究成果報告書、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院、2015、48

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

宇佐見 森吉 (USAMI SHINKICHI)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：20203507

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：